

米国株スタイル別指数の特徴

ポイント① 長期的には米国株式はバリュー優位

株式市場で割安度によって構成銘柄の投資比率が分けられた指数をバリュー指数とグロース指数と呼びます。米国株式市場のパフォーマンス（トータルリターン・ベース）をバリュー指数とグロース指数に分けて見ると、長期的にはグロース指数よりもバリュー指数が優位であったようです。（図1参照）

2000年ころまではバリュー指数とグロース指数のパフォーマンス格差はそれほど大きなものではありませんでしたが、その後のインターネットバブルの崩壊後に大きな格差が付き、1980年12月から2018年7月までの期間で見ると、バリュー指数が61倍、グロース指数が43倍と、圧倒的な差がついてしまいました。

ポイント② スタイル別指数のパフォーマンス格差

スタイル別指数のパフォーマンスをもう少し詳しく見てみましょう。スタイル別指数の3年パフォーマンス（年率換算）を見てみると、バリュー指数が良かったり、グロース指数が良かったり、局面ごとに細かな格差が生じており、これまでは概ね交互に入れ替わってきたようです。ちなみに、バリュー指数優位の局面が全体の51%を占めました。（図2参照）

ただし、図2の赤い円で囲んだ「インターネットバブルの崩壊」の際のパフォーマンス格差が非常に大きく、近年はグロース指数の優位が続いていますが、全体としてはバリュー指数が優位だったようです。なお、最近のグロース指数優位が既にかかなり長い時間が経過していることには注意が必要かもしれません。

ポイント③ スタイル別指数と景気との関係

米国株式市場のスタイル別指数と米国景気（GDP成長率）との関係を見てみましょう。図1、2の観測期間で特に大きな差を生んだ「インターネットバブルの崩壊」局面は景気後退期でした。では、景気後退局面は常にバリュー指数が優位であったかという点、必ずしもそうではなかったようです。（図3参照）

図3での初期局面は景気回復期でしたが、バリュー指数が優位でしたし、近年のリーマンショックの頃は景気後退期でしたがグロース指数優位でした。以上のように景気局面とスタイル別指数の優劣には必ずしも一定の法則はないようです。しかし、交互に訪れることは続いているようですので、今後はバリュー指数へも注目したいところです。

図1：米国株のスタイル別指数の推移

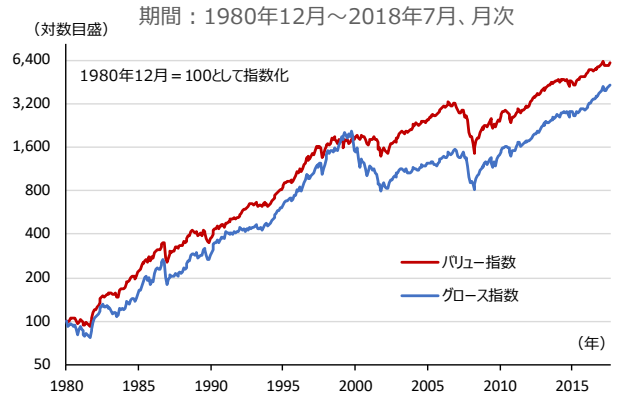
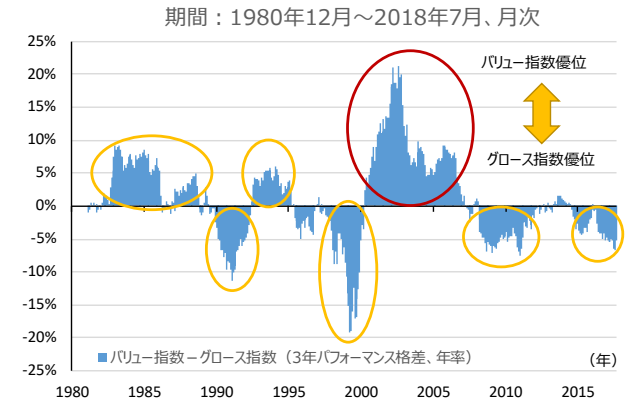


図2：米国スタイル別株価指数のパフォーマンス格差

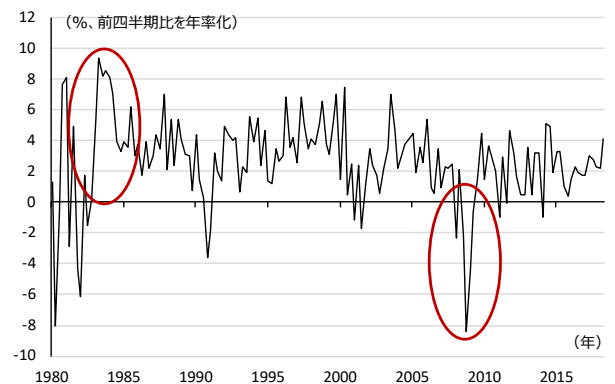


(注)バリュー指数は、Russell1000 Gross Value Total Return Index。グロース指数は、Russell1000 Gross Growth Total Return Index。

(出所)Bloombergデータより野村アセットマネジメント作成

図3：米国GDP（国内総生産）成長率指数の推移

期間：1980年第1四半期～2018年第2四半期、四半期



(出所)Bloombergデータより野村アセットマネジメント作成

当資料は、投資環境に関する参考情報の提供を目的として野村アセットマネジメントが作成したご参考資料です。投資勧誘を目的とした資料ではありません。当資料は市場全般の推奨や証券市場等の動向の上昇または下落を示唆するものではありません。当資料は信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。当資料に示された意見等は、当資料作成日現在の当社の見解であり、事前の連絡なしに変更される事があります。なお、当資料中のいかなる内容も将来の投資収益を示唆ないし保証するものではありません。投資に関する決定は、お客様ご自身でご判断なさるようお願いいたします。投資信託のお申込みにあたっては、販売会社よりお渡します投資信託説明書（交付目論見書）の内容を必ずご確認のうえ、ご自身でご判断ください。